

氏名	下西 進
ヨミガナ	シモニシ ススム
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第463号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 記録された「セルフ」のイメージをめぐる研究 〈作品〉 I'm on Earth

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 時啓
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	八谷 和彦
（副査）	武蔵野美術大学	教授		山崎 博

（論文内容の要旨）

研究の目的

本研究は、筆者自身の表現行為を始め、様々な芸術家たちによって作られた美術作品を取り上げ、人々の「セルフ」を記録する行為と、社会との関係性に焦点を当てたものである。

美術作品における、芸術家と社会との関係性を考察しながら比較する事で、「セルフ」を表現する芸術家たちの作家像、筆者自身のアイデンティティ探求の問題を浮き彫りにすることを目的としている。

筆者は〈自己〉に向けられた視線を表象化する行為として、カメラという道具を扱い、「セルフ」を記録している。筆者の表現は、〈他者〉から特別に見られるという、個人的なきっかけから出発した行為であるが、単なる自身の身体の記録ではなく、身体を所有する〈自己〉の、〈自己〉が所属する社会の、そして社会を構成する〈他者〉の記録でもある。こうした記録を通じて、筆者自身の体験や感情が、自身の記憶を越え、〈他者〉の記憶として還元されることは可能であろうか。本論文では、カメラメディアによって記録された〈自己〉の持つ記憶と体験が、〈他者〉へ伝達可能な記憶として還元される可能性があることを、そのプロセスを辿って考察した。

本論文の構成

構成としては大きく4章に分かれる。

第1章では、「記録された『セルフ』のイメージー視点を入れ替える試み」として、筆者がこれまでに行った制作を通じ、その作品の背景と概念を述べ、筆者の試みがどのような結果をもたらして〈自己〉の内部に影響のかを明らかにした。ここでは、このテーマ掘り下げのためのケーススタディとして、美術家として活動する筆者の作品を取り扱い、〈自己〉の内面から沸き起こった感情が、いかなる行為として現れて、筆者はそれを表現してきたのかを論じた。

第2章「作られた視点」では、様々な作家による複数の視点をもった美術作品を取り上げ、そこで得られた見解から、〈自己〉と〈他者〉の関係性を巡る視点を浮き彫りにした。

人間は、〈他者〉に対して独自の〈まなざし〉を持ち、さらに自らの中に他者性を持つことを指摘した上で、表現者たちはその〈自己〉に内在する〈他者〉を美術作品として表現してきたことを述べた。さらには、イメージが現実にも影響を与える例などを取り上げ、我々の世界が想像によって創造されていることを論じた。

第3章は「可視化された〈自己〉」と題し、言語学的、社会的、認知科学的視点から、〈自己〉と〈非自己〉の境界が如何にして築かれ、社会の構造がどのような視点から形成されているのか、また現代の様々な問題に対する我々の視点は、どのようにあるべきかを論じた。ここでは、言語表現が独自の感覚を形成し、

その感覚が〈自己〉と〈他者〉との間における摩擦やコミュニケーションを形成していることを指摘し、その構造を明らかにした。

第4章「現在の作品制作について」では、第1章から第3章までを踏まえ、現在筆者が制作している映像作品について考察した。ここでとり上げた作品とは、都市の持つ歴史や場の空気、見ず知らずの〈他者〉との距離を表現したものである。映像作品の中で、こうした見えない雰囲気や〈他者〉の感情が、どのように可視化されるのかを考察している。

終章では、これまで述べたことのまとめとして、我々人類の〈他者〉との関わり合いが如何なる視点で保たれているのかをまとめ、そこから現代の社会が抱える様々な問題への可能性を述べた。特にここでは、第3章で述べた、言語表現が人々の感覚を独自に形成していることを踏まえた上で、我々の〈他者〉への態度が、いかなるものであるべきかを論じ、まとめとした。

結論

社会的な〈自己〉は、〈他者〉によって形成されていると言える。その〈他者〉には、英語を話す〈他者〉や、かつての歴史を知っている〈他者〉というように、言語や歴史も内包した〈他者〉であると言える。美術家たちは、こうした〈他者〉との関係性において、独自の〈まなざし〉を持ち、〈他者〉との関係性を表現し続けてきたと言えるだろう。こうして生み出された作品は、美術家の死後も、更なる〈他者〉に影響を与え続けていることが分かった。このようなことから、筆者が個人的な感情から「セルフ」を記録する行為は、〈他者〉によって影響を与えられ、時代や場所を超えた〈他者〉に影響を様々に与える可能性を持つことが分かった。こうした〈他者〉への影響が、複雑な世界を構築しているのである。

今後の課題としては、様々な領域において、より多くの表現者たちの調査を行い、様々なアイデンティティを持った彼らの視点を加え、深く掘り下げた研究として完成させることが必要である。さらに、「セルフ」を記録する表現が、社会学や人類学的な視点をより多く含めた学際的な研究として、他の研究領域と交差し、発展することを今後の課題としたい。

（論文審査結果の要旨）

「自己」のアイデンティティは、「他者」とのコミュニケーションの中で成立するが、筆者は幼少期の難病治療（ステロイド投与）による顔貌変化から、自己が自己として認識されない、いわば他者の視線によるアイデンティティの崩壊というトラウマを抱えてきた。本論文は、第三の眼ともいえるカメラによる自写（「セルフ」）で、自己と他者と社会のじつは入れ子状の実態を記録し、そこに記録された記憶や体験の自他および社会での共有をめざす筆者の試みを論述したものである。

第1～3章の大部分は、自作品を含みながら「自己」定位の様々なケースを検証し、第4章で今回の提出作品を解説している。まず第1章では、家族写真、自分の身分証明書の写真、自分と同じ「進」という名前を持つ人々のポートレートなど、彼個人の「自己」イメージを検証したのち、視点を社会的要因に拡大。個人史としての郷里広島が、外国では世界史上のHiroshimaだったこと。台湾で檳榔（びんろう）を売る女性に扮装し、性差を確認するなど、視点を入れ換えることで「自己」が属す社会性を検証している。そうした中で、群衆の中に定点的に立つ自分を、長いレリーズで撮影する地上の「セルフ」から、長脚やバルーンにカメラをとりつけ、上方から自分と周囲を撮影する手法への変化は、自己と他者から、自己・他者・社会の関係を映し出そうとする視点への変化を示している。第2章では18人の作家をとりあげ、自己と他者の一体化、曖昧化など様々なケースに言及しながら、作品として表象化された作家の視点や記憶が、鑑賞者という他者の想像力を喚起する可能性を確認する。また第3章では、カメラによる生物学的自己、脳化社会における社会的自己、コミュニケーションでの二人称に見る複数言語での自他の関係などを検証。第4章の提出作品の解説では、東京、パリ、ワイマール、イスタンブール、ソウル、台北など、世界各地の都市で撮影したビデオ作品について論じている。長脚の先にカメラをとりつけ、じっと見上げる筆者と行きかう人々を撮影する手法はすべて同じだが、そこでの人々の反応の違いは、とりもなおさずそこでの自他の関係性の違いを映し出している。

そもそも筆者のトラウマから発した作品コンセプトと論文テーマだけに、論考のモチベーションとリア

リティーはきわめて高い。それゆえに時折感情的になる文体の修正を要した箇所もあったが、緩みのない論述展開には、筆者がこれまで煩悶しながら思考してきた多くの事柄が凝縮されている。とくに注目されるのは、「自己」意識という抽象的で広範領域にわたるテーマを、様々な角度から切りこむ視点で実践してきたプロジェクトのアイデアの豊富さと、そこから得られた情報の明快な分析力である。審査会での審査員のコメントも、それに呼応するように質の高いものが多かった。学位論文にふさわしい内容として、審査員一同の好評と承認を得た。

（作品審査結果の要旨）

下西進の作品に一貫して見受けられるのは「見られる自分」および「不特定多数の他者からの様々な視点」に対する強いこだわりである。その理由として、彼の小中学生時代の病歴と治療のための投薬により、自身の顔が急激に変化し、他者から同一人物と認識されないのではないかとという少年時代の強い恐怖心があるのだが、そこから生まれた彼の作品は、それを再び自身で構成し、乗り越えるためのツールとして機能している。彼の多くの作品は「作者自身が作品の中に映り込むこと」「不特定多数の他者が画面の中に混在していること」「カメラと自分自身が物理的につながっていること」に一貫性があるのだが、例えば台湾のビンロウ売り女性に女装した彼自身のみが画面に登場する写真作品「I'm Her」でも「異性に向けられるべき、同性の視点」を観客に強く意識させる点で、他の作品と同様の構成要素をもった作品と言えるだろう。

下西は、自作の非常に長い一脚を使い、俯瞰状態で自分も含めた群衆をカメラで撮影する代表作「I'm On Earth」を長らく制作してきたが、2012年頃から、これを動画で展開した作品を制作し始めた。今回の博士展で展示されたのは、パリ（2012年）、イスタンブール（2012年）、台北（2013年）、東京（2014年）、ソウル（2014年）、それぞれの都市の街角で撮影された5点の映像作品である。各国の多くの群衆は、通りに立ち異様に長いポールを手に虚空を見つめる作家を不思議なものでも見るように見たり、あるいは全く意に介さず通り過ぎて行く。それは、どこの都市でも同じ光景であるが、群衆のざわめきが静かに響く各地での反応を見ると、都市間、あるいは時間帯により微妙な差異があるようにも思える。私達の世界で常に起きていること……つまり人が人に対する反応そのものを中心に据えた本作だが、それゆえに長時間会場に滞在すると、ある種の法則性に目を開かれていくような不思議な感覚を本作は与えてくれる。このような空間を成立させた点をもって、本作品を博士号に値すると認定する。

（総合審査結果の要旨）

下西進君は、武蔵野美術大学映像研究科時代から群衆の中にいる自分自身を長いレリーズを使用して撮影する一種のセルフポートレート作品を制作してきた。大型カメラを使用し、1秒間のスローシャッターで撮影する事により廻りの人々の大半はぶれて写り、本人だけがカメラを見つめて中央に立ち尽くす精緻な白黒の写真作品である。そして次には非常に長い一脚を使用し空中から俯瞰しその脚を支える自分と廻りの群衆や街角を世界の都市で撮影するシリーズ「I'm on Earth」を始めた。さらに様々な制作や実験を経て、博士審査作品としては、世界の5都市において、同様な撮影方法を用い動画で撮影する作品を選んだ。

論文は最終的にはセルフの作品シリーズを裏打ちする、『記録された「セルフ」のイメージをめぐる研究』となった。「自己」のアイデンティティは他者との関係性の中で成立する。幼少期に体験した持病治療のためのステロイド剤投与によって変貌してしまう自身のムーンフェイスと呼ばれる顔貌。その短期間に変化してしまった自身の容貌。それに対して無邪気な視線を浴びせる廻りのこども達。その他者の視線がトラウマとなり、見られる自分に強いこだわりを持つようになったと制作と論文の動機として下西は書く。

その強い動機にそって書き起こす論文は、自己は他者によって規定される。他者を見る行為、他者から見られる行為は実は、自身の脳の働きである、とも記す。自己イメージから、社会的要因に拡大し自身の制作「I'm under the Sky」では故郷の広島が世界ではHiroshimaであったことや、「I'm Her」では台湾にて檳榔売りの女性に扮装しての同性からの視線を浴びることで性差についての考察も行った。自身の制作について分析することを基本にしながらも「作られた視点」として視線の導かれ方や、他者となった自画像や自己

と一体となった他者、そして内側と外側、見えること見えない事など、様々に視点の在り方を国内外の作家18名ほどの作品について分析し、自身の制作の分析とともに比較検討した。

そして作品は、長い一脚に取り付けられたビデオカメラによる自身を含めた路上の記録であり、東京、パリ、イスタンブール、ソウル、台北という、都市の路面に下西が立ち1時間ほど立ち続けて記録されたものである。下西は混雑した路上に立ち続け通行する人々は、下西に対して反応する者もいれば、全く意に介さない者も多い。それぞれの都市によって微妙に反応が違う。整然とした印象もあれば、猥雑な印象を持つものもある。いずれも第3の目としてのカメラによる記録として、下西の存在によって人の動きがアフォードされ、町の確固とした特質が浮かび上がった。論文も作品もいずれも高評価で博士号取得に相応しい高評価を得た。